

「地域づくり・人づくり実践発表会」パネルディスカッション（概要）

テーマ「岡山の社会教育の可能性を考える」

平成29年2月19日（日）県生涯学習センターにて



（写真左から順に）

ファシリテーター	中山 芳一 氏	岡山大学全学教育・学生支援機構 助教
パネリスト	赤迫 康代 氏	NPO法人子ども達の環境を考えるひこうせん 代表理事
	角野 いずみ氏	津山市北小ひなづる児童クラブ 指導員
	藤井 裕也 氏	NPO法人山村エンタープライズ 代表理事
	重森 しおり氏	岡山市立中央公民館 主任（社会教育主事）
	岡本 啓	岡山県生涯学習センター 所長

1 パネリスト活動紹介

○赤迫 康代 氏（NPO法人子ども達の環境を考えるひこうせん 代表理事）

子ども達が多様な大人に関わってもらいながら豊かに成長してほしいという願いで、備前市伊部で平成13年に子育て支援の活動を始める。大人も子どもと関わることを通して、自分の気づきや成長、人生のプラスになるという想いから、その仕組みづくりとして、平成19年に築100年の古民家を借り、乳幼児から高齢者まで、年齢、立場を超えた多様な人がつながれる、いつでも誰でも集える場所「くるみの森」を開く。そこでは、主に就園・就学前の子どもが、どろんこになりながら、子ども同士の衝突もある中で、ありのままの姿で過ごし、その姿を保護者が温かい表情で見守っている。そんな風景が「くるみの森」の文化。この文化は、簡単にできあがったのではなく、いろいろな工夫によりできた。特に大切にしたのは「サロン」。ここでの「サロン」とは母親たちが子どもたちの自然な姿を観察し、その成長をみんなで気づき、話し合える場、自然に学び合える場のことである。「サロン」を積み重ねていくうちに母親たちは、わが子への関わり、よその子への関わり、よそのお母さんとの協力やつながりなどに変化が見られ、内から外へと目が向くようになっていった。子育てには「学習」が必要。学習によって多様な価値観を共有しながら、大人も育つ。みんなが協力しあって子育てすることを目指して、乳幼児から高校生まで長いスパンで、親同士がつながることができるネットワークの拠点が増えていくことを願って活動している。



○角野 いずみ 氏（津山市北小ひなづる児童クラブ 指導員）

津山市で放課後児童クラブ（学童保育とも言う）「北小ひなづる児童クラブ」の支援員をして、23年目。放課後、地域の中を走り回っていた幼少の頃の自分たちとは異なる今の子どもたちの放課後の姿に危機感を感じる。学校の下校時刻が遅くなり、放課後の時間も短くなる中、学童保育の終了時刻は、午後7、8時になる。学校のように子どもたちがプログラム化された時間を過ごす学童保育もあるかもしれないが、「北小ひなづる」では、短い放課後にどれだけ友達と群れて遊ぶ時間を保証できるかを問い続けてきた。特に高学年では、学童保育の中だけで生活するのではなく、地域の中へ出て地域とつながることを大切にしている。地域を知り、人とつながり、この地域でどんな風に大きくなりたいかを描いてほしいという強い思いがある。4年生は、二人組を作り、テーマを決めて町の人にインタビューをして新聞を作る。5年生は、35kmのサイクリング。ひたすら自転車をこぐ。6年生は、「夕方バザール」をして、卒業旅行の食事代を子どもたち自身が稼ぐ。放課後の限られた時間の中で、地域の助けをもらいながら、子どもたちの夢の実現に向けて、最後までやり抜くという経験を大切に活動を展開している。



○重森 しおり 氏（岡山市立中央公民館 主任（社会教育主事））

公民館職員になって9年目。公民館で行っていることは、①公民館の主催事業、②グループ、サークルの自主活動、③施設の貸出の3つが基本で、どこに重点を置いているかは市町村によって異なる。公民館は何でもできるし、することが決まってないという社会教育施設であるが、そこが、良さでもあり、難しさでもある。公民館は、何でも学べる、活動できる場として、個人の生活に直結する課題について学習できるほか、自分の生活に直接的ではないが世の中の気になる課題について学ぶ機会も提供している。最近では、映像や情報機器などの学習講座も多い。幅広い年齢層が集まり、人が偶然につながるができるのは公民館の特徴。岡山市の公民館の取組で例をあげると、「川の生き物調べ」を行っている子どもと地域の川が出てくる児童文学について学んでいる大人とが、同じ地域の川について今と昔を調べたり、これからの川の姿を話し合ったりする講座に発展しているものがあり、まさに、人がつながる場となっている。今、公民館では、一方的に何かを教わるのではなく、いろいろな人たちがつながって学習し合っていて、新しくみんなで自分たちの地域をつくっていきこうという形が増えてきている。



○藤井 裕也 氏（NPO法人山村エンタープライズ 代表理事）

大学生の頃から、まちづくりに興味があった。社会教育主事はまちづくりの核となる存在だと思い、資格を取った。6、7年前に地域おこし協力隊として、地域おこしの活動を始める。その経験を買われて、美作市梶並地区の再生活動に参加し、NPO法人山村エンタープライズを立ち上げる。美作市の最北部は人口流出が激しく、外から人を入れていくことが課題となっている。3棟の空き家を改修して、移住者を募集したり、空き家バンクを作って人を増やしたりという取組は、まちの生き残り戦略の1つである。最初の1年は、ひたすら草刈りをして、地域の信頼を得る。さらなる移住者を入れるためにつくった「山村シェアハウス」には、ひきこもりや不登校の子たちが集まってきた。耕作放棄地、空き家、廃校活用など過疎地ならではの課題がある中、再生活動や地域のお手伝い活動をしながら、移住者の自立支援、就労支援へとつながっている。



2 連携の可能性について

【中山】多様な人が交わることで新しい取組が生まれるのではないかと考えますが、仮にこの4人が連携するとどんな社会教育ができそうでしょうか。そのあたり、岡本所長に伺いましょう。

【岡本】当センターは、学びによる地域づくり、人づくりを課題に取り組んでいます。県では、おかやま子ども応援事業を進めて、学校支援、放課後・土曜日等支援、家庭教育支援に取り組んでいます。支援を必要としている人たちとそれを提供できる団体がつながれば、学習の場が広がると思います。もっと効率よくできるのではないのでしょうか。例えば、赤迫さんが、学校園や公民館に出かけて家庭教育支援をする。角野さんが、学童保育から地域に出て行く。藤井さんが、学校ではできないプログラムを中高生に提供する。連携の接点を考えたとき、公民館は重要な役割を果たすと考えます。

【中山】つまり、つながり、連携の可能性があるという提案だと思いますが、それを受けて、パネリストの皆さんは、どう思われますか。

【重森】公民館は地域と共にある施設ですが、そこに地域の人たちだけでなく専門性のある人が入ることにより、地域の課題が解決できるように思います。ここにいる方は、それぞれ家庭教育、学童保育、地域づくりの専門家です。公民館職員はというと、人をつなぎ、学びの場をつくる専門家。だから、公民館は課題に取り組む専門家と地域をつないで、みんなで考える場が作れます。例を挙げると、発達障害のあるお子さんについて、不安や苦しみを抱えている親御さんがいて、それを、地域の課題として取り上げようとしたとき、公民館は何ができるだろうかという問いが生まれます。素人だけで目の前の問題は解決しますが、なかなか前に進みません。そこへ、NPOや支援センターなどの専門家に入ってもらうと、地域でどうやって取り組んだらいいのかをみんなで考えることができます。それらの取組を体験手記としてまとめ、多くの方の共感を得て、活動が広がっています。

【藤井】私は、高校と連携をしています。週に5コマ、地域学というような授業を学校の先生と役割分担をしながら進めています。地域の方に来てもらったり、高校生が地域に出ていったりしています。連携ということですが、NPOでもなかなか難しいのが現実です。まだまだ縦割りを感ぜますが、連携は必要です。角野さんとは連携があって、シェアハウスに入居しているメンバーで子どもが好きな人がいたので、学童保育に入らせてもらっています。行政はまだ各課が縦割りだと感ぜますが、地域づくりというジャンルは、いろいろな課を横につなげることができると思います。地域おこし協力隊は企画課だが、福祉や教育の部分でも活動している。こういう取組は増えています。

【角野】学童保育では、放課後子ども教室と連携しています。出かけていける範囲にある放課後子ども教室に参加させてもらっています。その一つが、商店街にある空き店舗を活用した「まちなか子ども基地」で、そこに行くと地域の人からいろいろな活動を体験できます。例えば、津山高専の先生と学生の工作教室やエコ活動をしている団体のソーラークッキング、お寺好きの地域の方が案内してくるお社巡りなどです。また、「七色教室」では、算数教室をしているので、週に1回1時間、学童保育の支援員が連れて行きます。発達障害の子には、「オレンジ子ども教室」で1対1の学習支援をしてもらっています。本来なら、保護者の役目かもしれませんが、働いている親に代わって学童保育ができることかと思っています。

【赤迫】家庭教育支援として連携している先に、岡山市立上道公民館があります。きっかけは、子育てを通じて乳幼児期から思春期までずっとつながるネットワークを作りたいという公民館職員さんの思いでした。年に5、6回ほどの講座を開催しています。講座を毎年積み重ねていく中で、お母さ



んたちがエンパワーメント（湧活）されていて、幼稚園や小学校でリーダー性を発揮する姿が見られています。NPOと公民館とどちらも主体となって企画から考えることができ、とてもやりがいを感じています。しかし、公民館の講座に参加される保護者は一握りなので、もっと一般の多くの人たちに届けるために、保育園、幼稚園、小学校にも入らせてもらっていますが、保育園は先生も保護者も忙しくなかなか学ぶ機会が作れない現状があります。保育園の保護者は、地域活動に参加しないまま、産休・育休明けですぐに職場復帰される方も多く、子育てについてじっくり考える余裕がありません。だからこそ、できるだけ楽しみながら子育てについて大事なことを伝えていく必要性を強く感じています。学童保育についても同じように思うので、もっと連携していきたいと思います。

3 岡山の社会教育の可能性について

【中山】ここからは、岡山の社会教育の可能性として、今とこれからについて会場の皆さんとパネリストと一緒に考えていきます。討議のテーマは、○×クイズで出していきます。

○第1問：あえて言うなら、社会教育は学校教育以上に重要である。

【中山】さあ、どうでしょうか。さっそく、会場に聞いてみましょう。

【会場】私は、皆さんに聞きたいことがあって、社会教育とは何か、もう一つ、生涯学習とは何か。学校は、生涯学習の中に位置づけられるひとつの時間。そう思うと、この場に学校関係者がいなくて、皆さんの意見だけを聞くのは、どうなのかなと思います。



【中山】これは手厳しい意見ですね。角野さん、どうでしょう。

【角野】北小ひなづる児童クラブは、学校の中にあります。この児童クラブを作ったのは、その当時の校長先生でした。放課後の子どもたちをどう育てていくかを意識されていて、当時のPTA会長さんと一緒に学童保育の必要性を感じてくださっていました。私は、地域活動をするということにこだわりをもっています。学校は大事ですが、学校との連

携を大切にしながら、社会の中でどう生きていくかを考える場も大切だと思っています。

【中山】はい、ありがとうございます。さきほどの問題提起についてですが、「25周年記念にぜひ学校の先生も入ってもらいましょう」ということをセンターの皆さんにお願いしたいと思います。

○第2問：社会教育を積極的に取り組むには、やっぱり、「ひと、もの、かね」が必要不可欠である。

【中山】それでは、聞いてみましょう。これは、○と×と分かれていますね。

【会場】私は○を挙げました。「ひと」がいないと始まらないと感じたので、「もの、かね」はなくても、「ひと」は必要だと思います。逆に、×を挙げている方の意見を聞きたいです。

【会場】私は×ですが、さきほどの人と同じ考えです。3つは揃わなくてもいいので、「ひと」が一番大切だということで、×を出しました。

【中山】なるほど、「ひと」というところですね。「ひと」は必要という方はどれくらいいますか？

…たくさんいらっしゃいますね。では、「かね」が必要だという方は？…いらっしゃらない。「ひと」が必要ということでしょうか。重森さん、いかがでしょうか。

【重森】「ひと」についてですが、「ひと」とは一体誰を指しているのかということもありますね。公民館の立場で言うと、公民館の職員は必要です。そして、もう一つ必要な「ひと」は、活動したい、学びたいと思っている「ひと」です。何かやりたいと思う人が全くいない中では、社会教育は始ま

らないと思います。

【中山】では、「かね」についてはどうでしょうか。赤迫さん、どうでしょうか。

【赤迫】小学校に出前講座に行かせてもらっていて「こんな安い謝金でいつまでやってくれるんですか」と先生に言われることがあります。確かに、強い思いや意欲があるときは、お金がなくてもがんばれます。でも、それを継続していくには、お金がないと難しい面があるように思います。さきほどの「ひと」について、「ひと」は大切だと思います。その「ひと」を育てていくためには「かね」が必要なきもあります。また、活動が本当の意味で成果を出すまで継続するには、お金が必要だと思います。

【藤井】過疎地では、地域に必要な教育、福祉、移動手手段などがなくなりつつあります。人件費がかかるからです。ならば、地域のみinnで「かね」を生み出し、社会投資していこうという事例が全国的にもたくさんあります。ある村では、羊羹をinnで作って売っていました。日本は、教育にあまりお金をかけない国ですが、まちづくりの分野で地域の側から教育投資をしていこうというのは大切だと感じます。

【角野】この質問を聞いたとき、「え、かね?」と思いました。「かね」がないとだめなのかと。お金がないからしないというのは、お金は与えられるものだと思っているからだだと思います。お金は、生み出すものと思えば良いのではないのでしょうか。先ほどの活動紹介でも言いましたが、6年生は「夕方バザール」で10円、20円を稼いで、それを積み重ねて卒業旅行に行きます。全てではないですが、食事代を自分たちの稼いだお金で賄っています。時間はかかるが、お金を稼ぐためにどれだけの労力を使うかを体験してほしいと思っています。社会教育は時間が必要です。時間をかけて生み出していく知恵があるはずで、最近では社会貢献したい企業さんも多いので、そういうところを探すこともお金を生み出すことだと思います。

【岡本】「ひと」も「かね」もないからできないというのではなく、人とつながることで、できることを広げていく、質を高めていくということで工夫できればと思います。しかし、基本的な人材は必要で、養成と配置に関しては行政もがんばっていかなければならないと思います。

【中山】皆さんの話を聞いていて、セレンディピティという言葉が浮かんできました。偶発的ではあるが、新しい何かを生み出すという概念です。まさに、「ひと、もの、かね」の問題は、新しい人たちとの新しい出会いが導いたり、生み出したりする可能性もあるかもしれないですね。そこに、公民館や行政が関わってくれるというのが強みになるかなとも思います。

○第3問：岡山県は、すでに社会教育に関して『教育県』である。

【中山】これは、×が多いですかね。○の方もいますね。皆さん、揺らいでいるのかな。

【会場】とてもじゃないけど、教育県とは言えないと思います。社会教育として取り組んでいかなければならないことがたくさんあって、それが満たされているとは思えません。私は、自分の土地を冒険遊び場として提供していますが、行政がそういうことをしているところはほとんどありません。

【重森】私は×を出しました。社会教育をすごくがんばって進めているところはたくさんあります。でも、学校教育ほど取り上げられていません。学校については、施策としても目に映る機会はたくさんありますが、社会教育はそうではない。社会教育という言葉が浸透していないと感じます。もっと、取組を見える化する必要があると思います。私自身で言うと、こういう場に立って皆さんと一緒に話をする機会を増やして、社会教育を広めていきたいと思っています。押しつけるのではなく、社会教育の広さというものを皆さんと話し合っていく機会が増えれば、特別な言葉ではなくなると思います。



【角野】私たちは社会資源を有効に使う権利はあると思います。それには、横につながれるような形で情報提供していく必要があります。人は、そのときに必要だと思ったことを求めます。子育て中の方は育児のこと、高齢者は人とのつながり、働く方も何かを求めています。そんな方たちをつなぐように、各団体をつなげていくということで社会資源を有効に使えるのではないかと思います。

【藤井】私自身、社会教育の恩恵をたくさん受けてきました。地域の公民館やNPOなどは、中高生の時からずっと関わりがありました。親が、いろいろな場所に連れていってくれたからです。そのおかげでつながりができ、社会教育の世界を知り、高校生になって自分の意志で参加し始めました。その当時、知り合った方は今もどこかで見守ってくれています。社会教育の場はあります。そこに若い人を連れて行ってくれる人が必要なのだと思います。

【中山】私の持論なんですが、今日は「社会教育」ということで話し合っていますが、私の好きな言葉は「教育福祉」なんです。教育と福祉が結合するという考え方のほうが私は好きで、学校教育か社会教育かというよりも、今日のパネリストの方は、教育と福祉が合わさっていく取組をされているように感じました。教育県岡山というと、閑谷学校や寺子屋の話になりますが、福祉で言うと、石井十次さんや留岡幸助さんがいらっしゃる。もともと岡山は福祉でも先駆的な県であります。そう思うと、教育県というより教育福祉県であり、教育と福祉をつなぐのが社会教育かなと思います。



○第4問：今から、20年後、岡山県は日本で1番の社会教育県になっていると思う。

【中山】さあ、いかがでしょうか。さらに20年積み重ねるということですね。パネリストは、○が多いですかね。

【会場】私は×を出しました。同級生が町内会長をしていますが、全くポリシー（方針）がありません。役が回ってきたから仕方なくしていると言います。もっと社会を知って、みんなに教え、活性化するのが、人間としての生き方だと思うので、私はみんなを刺激していますが、「あの人は変わった人だ」と言われます。大きな役が回ってきたら、地区をぶっ壊して作り直したいと思いますが、なかなか出番がありません。今の状態では、「みんな、もっとしっかりしろ」と思います。

【中山】「みんな、しっかりしろ」ということですが、パネリストの皆さん、どうでしょう。

【藤井】もっとしっかりします。私がしている「だっぴ」の活動というのは8年くらいになりますが、社会教育の一端を担おうという思いでしています。地域側から学校に関わっていくという組織が必要だと思っています。それをしっかり進めていくという意志があるので、○にしました。

【中山】先ほどの方が言われましたが「スクラップアンドビルド」（壊して立て直す）というのはどう思われますか。別の方法がありますか。藤井さん、どうですか。

【藤井】田舎でよく見かけるのですが、20、30代の地域おこし協力隊と平均年齢70、80代の地域の協議会には、ジェネレーションギャップ（世代による相違）があります。3年間かけて、地域のことを教えてもらいますが、なかなか価値観の違いは埋められません。そこで、最近、地域づくりの分野で使われているのが「かかわりしろ」という言葉です。地域側は「かかわりしろ」を若者に対して持たせてあげます。そんな中で、地域に力がついてきています。若い人というよりは、地域側が「かかわりしろ」を作っていく感じですか。失われていくものや形骸化していくものはありますが、

「かわりしろ」というものが、新しく魅力的なものを作っていくのではないかと思います。

【角野】自分の思いと地域の思いにギャップがあるのは、どの時代にもあるように思います。でも、今日のこの場があるかぎり、たぶん来年もこの場があって、また次の年もあると、私は信じています。そのときに、必ず発見があり、出会いがあって、やってみようと思う誰かがいます。実践されると振り返りがあり、感じるものがあります。それを次へと発信していくと思います。できないものをできない人にやらせるなんて絶対無理で、できる人にできることを楽しんでしてもらう。大きい力でなくても、小さな力も10人、100人と集まれば大きな力に変わっていきます。今日は20周年ですが、これから21年、22年と年月が重ねられて、そこには、必ず、岡山県の社会教育の発展、その時代にあった発展があると信じています。



【赤迫】私は、20年後がそうならいいなという願いはありますが、それは、やり方次第かと思います。工夫が必要だと思います。角野さんも言われたように、子どもは大人を見て育ちます。大人たちが育ち合える場がたくさんあれば、子どもたちも育っていくと信じてがんばっていきたいと思います。

【重森】私も希望的観測で、社会教育県になっていけばいいなあと思います。今日は、NPOの方が3人もいらっしゃいますが、岡山県はNPOの活動が増えていると思います。NPOを継続していくには学びが必要です。活動すればするほど、新しいことを学んで、いろいろな人とつながって、活動が続いていくのだらうと思います。岡山県は、それができているんだと思います。人が学ぶということは大切で、学び続けるということが必要で、そういう学びの場が公民館だけでなく、NPOなどいろいろなところにたくさんあれば、その人のそのときのニーズに合わせた学びができると思います。そういう活動をしている人たちが、今日のようにお互いに実践を話して、つながっていくということが大切だと思います。ゆるやかにつながる感じで学びが広がっていけばいいと思います。

【岡本】平成25年に、当センターが岡山県下で独自に調査したところ「生涯学習」という言葉の認知度は、各世代90%くらいあります。これは、他県と比べると高い。また、学習の成果について活用する場面に何らかの形で参加したいと回答した方は、8割ほどいらっしゃいます。かなり大きい数字です。県内の公民館にお聞きしたところ、県内外の公民館の活動事例について学びたいと回答した館は8割ありました。つまり、関係者の意識は高いと思います。今日のように、多様なステークホルダー（利害関係者）、手法としてのネットワークの考え方が広がっていくことで、今までとは違う取組ができていくように思います。何かしたいと思っている人はたくさんいて、関係する人たちももっとよりよく展開していきたいと思っている。そんな中、ある瞬間に活動が大きく広がっていくという期待をもっています。これからのネットワークを広げて、がんばっていきたいと思います。

【中山】フィンランドの教育学者ユーリア・エンゲストロームが、ネットワークを作るにはネットワークが必要だと言っています。ノット(knot)とは、結び目という意味です。ネットワークというと、全体を見てしまいがちですが、網を作り上げる結び目にもっと目を向けるべきで、その結び目は、状況、関係、時代に応じてどんどん変わっていくものだということです。そういう意味では、これからの21世紀後半に向けて、社会教育、教育福祉のあり方は学校教育も含めて、柔軟に、ゆるやかに、しなやかに生み出せるのではないかと、今日、皆さんと共有できたと思います。ありがとうございました。